

慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resources

Title	日本のMBOにおけるバイアウト・ファンドのエグジット行動
Sub Title	
Author	六代, 輝(Rokudai, Akira) 青井, 倫一
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	2004
Jtitle	
Abstract	
Notes	不可
Genre	Thesis or Dissertation
URL	http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00002004-2014

論文要旨

所属ゼミ	青井 研究会	学籍番号	80329089	氏名	六代 輝
(論文題名)					
日本の MBO におけるバイアウト・ファンドのエグジット行動					
(内容の要旨)					
<p>近年、日本における M&A が急増しており、中でも特にバイアウト・ファンドの活動が活発である。その投資対象や手法は個別のバイアウト・ファンドによって異なるが、本論文では特に、日本における MBO 案件に焦点を当てることとした。</p> <p>MBO は、事業再編、事業承継、非公開化等に活用できると言われるが、それらをバイアウト・ファンドの視点から特にエグジット行動に絞って分析した。さらに事例研究を行い、最終的にバイアウト・ファンドのエグジット行動についての仮説導出を行った。</p> <p>MBO は、暖簾分けに近い手法であるとも言われており、確かに事業再編、事業承継、非公開化等に活用されている。しかし、実際に行われている案件を調査する過程で、大多数が経営陣よりも、バイアウト・ファンド主導で行われている案件であることが判明した。</p> <p>一方で、バイアウト・ファンドには出資をしている投資家が存在するため、その目指すところは、あくまでファンドとしての投資収益率向上である。そのバイアウト・ファンドが MBO への投資を行っているということは、その投資から高い収益率が見込めるということに他ならない。</p> <p>そこで本論文では、バイアウトの行動を特にエグジット段階の意思決定に焦点を当て、あくまで経済合理的な投資収益率追求型の投資主体として、バイアウト・ファンドはどのようなエグジット方法を選択する傾向にあるかということ进行を考察した。</p> <p>そして、そこで提示した枠組みを用いて、具体的事例分析を交え、バイアウト・ファンドのエグジット行動について考察した後、最終的に仮説導出を行った。</p> <p>その仮説とは、下記の二点である。</p> <p>I. 日本の MBO においてバイアウト・ファンドは、一括で完全エグジット可能な手法 (M&A またはセカンド MBO) をエグジット方法として優先的に選択する傾向が見られる。</p> <p>II. 企業の将来像を考慮しないようなエグジットを行うバイアウト・ファンドは、売り手や新経営陣にとっての評判が低下するため、ファンドの運用期間を通して案件を獲得し続けることが難しくなる恐れがある。</p> <p>日本の MBO は、今まさに現在進行中であることから、検証できる事例は限られていたため、仮説の導出で論文を結ぶこととした。しかし、バイアウト・ファンドは基本的に経済合理性のみを追求する主体であるものの、低資本効率下の日本企業にとって、そして今後の MBO 市場において非常に重要な役割を担う主体であるという結論に至った。</p>					